

## 2025年12月7日降臨節第2主日

イザヤ書11章1－10節  
ローマの信徒への手紙16章4－13節  
マタイによる福音書3章1－12節

新しい教会歴、降臨節も第二主日になりました。旧約日課は先週に引き続きイザヤ書です。先週のイザヤ書の箇所は、「平和」を主題とした有名な箇所でしたが、本日の箇所も「平和」を指し示す箇所です。背景には、大国が勢力を競い合う歴史の流れの中で歩み続ける小さな集団、イスラエルに訪れる滅びがあります。そのイスラエルの滅びに関する預言を通して、まことの「平和」が示されます。

本日の箇所は、「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち」（イザヤ11：1）という預言の言葉から始まります。エッサイとは、ダビデの父のことですが、「株」は、ダビデ王の系譜を意味し、さらにはイスラエル王国全体、そしてそれを受け継ぐ南ユダ王国全体を示します。ただし、「若枝」をどうとるかは意見が分かれます。ダビデ王の系譜という、一つの系譜から希望の若枝が出るという具体的な意味とも、一度切り倒された切り株から「若枝」が出るという一般的な意味ともとれるからです。いずれにしても、新しい「若枝」に希望を託していることは確かです。つまり、大国間の中で揺れ動かされる小国イスラエルですが、それが主なる神様を信頼する時、「若枝」たる人物を通して、そこにつねに希望があることを示しているのです。

さて、その「若枝」である人物についても、「その上に主の靈がとどまる。知恵と識別の靈、思慮と勇気の靈、主を知り、畏れ敬う靈」（イザヤ11：2）とあります。彼は、その人格や能力ではなく、彼が、主なる神様の靈に満たされたからこそ、み心にかなうことが可能となるのです。もちろん、靈によって与えられる「知恵」、「識別」、「思慮」、「勇気」は、どれも人物形成に大切な要素です。しかし、もっとも大切なのは、最後にある「主を知り、畏れ敬う」ことです。

5節には「正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる」と述べられています。「正義」は、人間の政治・思想的な理念に基づく正義ではなく、主なる神様の「正義」です。次にくる「真実」は、「信じる」という動詞と同じ語根と言葉です。多くの箇所でここと同じく「真実」と訳してありますが、「ハバクク書」2章4節では「信仰」と訳してあります。ここで大切なことは、「真実」とは、主なる神様に対して真実であることです。つまり、それ以外の事柄がどれだけ大切に思えても、主なる神様と同列に並べてはならないです。エッサイの根からの「若枝」と呼ばれる人は、そのような「真実」があるからこそ、彼は「正義」を帯びることができるのです。そして、彼がまことの平和をもたらすことができるのです。

「平和」、それは大切な言葉であり、誰もが求める言葉です。また、人によって意味が異なる言葉です。そして、平和の意味が異なるからこそ、平和のために

戦いが生じるとも言えます。イザヤ書は、6節以下に主なる神様の望む平和のイメージを示しています。そこには、「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛と若獅子は共に草を食み、小さな子どもがそれを導く。雌牛と熊は草を食み、その子らは共に伏す。獅子も牛のようにわらを食べる。乳飲み子はコブラの穴に戯れ、乳離れした子は毒蛇の巣に手を伸ばす。私の聖なる山のどこにおいても、害を加え、滅ぼすものは何もない。水が海を覆うように、主を知ることが地を満たすからである」（イザヤ 11：6-9）とあります。ここで示されているのは、ファンタジーの世界のような平和の情景です。

先週のイザヤ書2章4節に示された平和のイメージが、人間の振る舞いに関する平和への示唆であるとするならば、本日の11章にあるイメージは、世界の環境全体に関する平和のイメージです。人間の間の争いだけではなく、危害を加えあうようになってしまっている動物、すなわち被造物の間においても、平和が訪れることを語っているからです。なぜ、そのようなイメージを示すことができるのか、それは、初めて知った事柄でも、イザヤが思いついた事柄でもありません。「創世記」の初めに描かれていたエデンの園、すなわち、主なる神様によって造られたもの、ことに動物たちが、和やかに生きている最初の情景に他ならないのです。

10節は「その日が来れば、エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く」とこの箇所がまとめられています。ここにある「栄光」とは、もちろん、主なる神様の「栄光」です。この言葉の「栄」「光」という訳語と、「輝く」という動詞の補いから、何かが目立つように光り輝いているように想像してしまいます。確かにそのような意味もありますが、意味するヘブライ語には「重しとする」という意味もあります。「何が重要であるかが示される」という意味ともとれるのです。エッサイの根から出た方が示すこと、それはこの世界で最も重要なことであるということです。そして、それは先週と同じく、主なる神様に対する謙虚な思いにほかなりません。

さて、降臨節第二主日の福音書は、ABC共通して、洗礼者ヨハネの「荒野で呼ばわる声」としてのお話が選ばれています。洗礼者ヨハネが何を考えて活動を開始したのかは分かりません。しかし、もし自分の考えや理念ではなく、『聖書（旧約）』すなわち神の言葉に促されて活動を開始したのであれば、今まで見て来た「イザヤ書」の預言とそこにある未来の情景、そしてそれから示され、今行うべき「正義」を自覚していたと思います。ヨハネ自身は、エッサイの株から出た「若枝」ではありませんでした。しかし、洗礼者ヨハネは、自分が活動している時よりも500年以前の預言を、そこにある希望を今の事柄として声をあげたのでした。

この「若枝」は、わたしたちにとってはもちろん主イエス・キリストです。わたしたちは今年もその「若枝」の誕生を祝います。その祝いを通して、まことの平和の実現を待ち望みたいと思います。